

第 111 回アメリカ微生物学会学術集会 (111th General Meeting • American Society for Microbiology)

山口 博之*

第 111 回アメリカ微生物学会学術集会 [111th General Meeting • American Society for Microbiology (ASM)] が、平成 23 年 5 月 21 日より 24 日迄、4 日間に渡りアメリカ ニューオーリンズ・コンベンションセンターにて開催された。今年の学会はハリケーンカトリーナにより大きな被害を受けたニューオーリンズで行われたこともあり、復興の状況などを懸念し参加者数が少なくなるのではと心配したが、例年通り大盛況であった。今年の ASM は、シンポジウム 256 セッション、ポスター発表 2,842 演題にのぼった。今回の学会は二人の大学院生(大学院博士過程 2 年生林君と大学院修士課程 2 年生奥出さん)とともに参加した。二人の学生にとっては国外での学会発表デビューである。

この学会は微生物の全てのジャンルを網羅する幅広い裾野を持つ大変アクティブな学会である。またアメリカの主要都市(ワシントン DC、アトランタ、オーランド、ボストン、サンフランシスコ、サンディエゴなど)を順繰りに巡ることもあって次の開催地がどこになるのかも関心事の一つである。アメリカの学会ではあるが、ヨーロッパのみならず日本を含むアジアからも多数の参加・発表が見られる国際色豊かな学会である。それ故に、参加することで学ぶべきことがとても多い学会であり、平成 12 年アメリカ留学中に参加したのをきっかけに毎年参加し続けている(2009 年はインフルエンザの騒動で欠席)。特にポスター会

場は常に熱気に包まれており、つたない英語ではあるが、他の研究者と新しいアイデアや方法、さらに自らの発表に関する屈託のないディスカッションが持てた時は、参加して良かったといつもながら感じる。

今回の学会シンポジウムで特に印象に残っているのは、二日目の午前中のシンポジウム「Microbial Biogeography」中の Ruth Ley の発表である。彼女は、“The immune system in mammalian gut microbial biogeography” というタイトルで、腸管粘膜面での腸管微生物フローラを介した消化管の恒常性維持機構について発表した。彼女のデータによると腸管フローラを構成する細菌が上皮細胞を刺激することで抗菌ペプチドが誘導され、そのペプチドがフローラ中の細菌の選別・維持を行っているというものである。我々の体の細胞と微生物が複雑に連動して初めて生体の恒常性が維持され、またその一方でその微妙なバランスの崩壊が病態形成を促すことを示した研究発表は極めて興味深い。彼女の成果は、*Science* (5883: 1647-1651, 2008) に掲載されている。発表内容が *Science*、*Nature*、*PNAS*、*Cell* といった超一流雑誌に掲載されたものも少なくなく、大変刺激的な発表がずらりと並んでいるのもこの学会の特徴の一つなのかもしれない。

さて我が研究室の大学院生のポスター発表は如何に。さすがに北大に現役で入った学生だけあっ

* 北海道大学大学院保健科学研究院病態解析学分野感染制御検査学研究室 hiroyuki@med.hokudai.ac.jp



フレンチマーケットにて

て、英語力はたいしたもの、緊張したおもむきとは対照的に、物怖じせず質問に対応していたようであった(自らの発表もあり遠望のみ)。学生がそのやり取りを通して少し遅くなったように感じるのは、気のせいだろうか。学会会場内は一切の撮影が禁止されていたので、学会会場の風景は

紹介できないが、ニューオーリンズでの学生の奮闘ぶりをたたえ、フレンチマーケットで撮影した二人の写真を掲載したい。

さて来年の ASM はサンフランシスコ。この学会は私にとって活力の源なのかもしれない。